Osaka University Knowledge Archive

Title	ダイクシス的方向表現とOrigo : 想定上のダイクシスにおけるher-とhin-の空間的用法に関する一分析
Author(s)	瀧田, 恵巳
Citation	言語文化研究. 2009, 35, p. 73-94
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/11790
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

ダイクシス的方向表現とOrigo

― 想定上のダイクシスにおけるher-とhin-の空間的用法に関する一分析 ―

瀧　田　恵　巳

Es werden die lokalen Bedeutungen von *herab-hinab, herunter-hinunter, herauf-hinauf, herüber-hinüber, heraus-hinaus, herein-hinein* behandelt. Besonders wird über ihre deiktischen Eigenschaften im Rahmen der Deixis am Phantasma diskutiert. Dabei nehme ich aufgrund der Sprachtheorie von Bühler vier Typen der Origo an: die sich bewegende Origo als Ausgangspunkt des Sehens (Typ a), die sich bewegende Origo ohne einen Ausgangspunkt (Typ b), die statische Origo mit (Typ c), die statische Origo ohne (Typ d). Aus der Untersuchung der Sätze aus zwei Geschichten ergibt sich, dass 75% der Sätze mit *her-* zu Typ c gehören, während 45% der Sätze mit *hin-* in Typ b, und 33.5% in Typ d klassifiziert sind. Die Origo mit einem Ausgangspunkt lässt sich mehr mit dem authentischen Sprecher assoziieren als die ohne einen Ausgangspunkt. Daraus stellt sich heraus, dass sich in den Sätzen mit *her-* die Existenz des Sprechers besser erkennen lässt, als in denen mit *hin-*.

キーワード：方向表現による空間的用法，想定上のダイクシス，Origoと視点

１．問題提起及び対象の限定と構成

主要且つ第一義的な意味として，herは「話し手もしくは話し手に準じる者（以降，下線部を便宜上「話者」と呼ぶ）へ向かう方向」，hinは「話者から離れ，ある目標へ向かう方向」という空間的意味[1] を持つ。

両者の示す方向には話者の関与に次の相違が見られる。即ちherでは，話者への方向を表す傾向が極めて強いのに対し，hinでは，積極的には話者から離れる方向を表わさず，むしろ，ある目標への方向を表す傾向が極めて強い。本論文著者の調査したところ，Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch（略号BW）において空間的と見なされる用例は，herに100例，hinに220例ある。herについては，単独で話者への方向を表す例や，話者を目標とする方向表現を伴う例が81例あり，全体の81%を占めている。それに対して単独でhinが用いられる場合，「話者から離れる方向」と見なされる例はわずかに2例（例：

1）このherとhinの意味記述は，Latzel(1979:3f.)による動詞とのコンビネーションにおけるherとhinの中心的な意味定義を元に，同書の他の意味記述および末尾に挙げた各辞典におけるherとhinの冒頭で挙げられている記述を参照し，抽出した。

Der Schnee schmilzt schon ***hin***. (BW:584)「雪はもう溶けている」）（全体の0.9%）で，むしろ先行内容から目標が推定される例（例：Als ich von dem Unglück hörte, bin ich sofort ***hin***gerannt. (BW:583)「その事故を聞き, 私はすぐにその場に駆けつけた」）が多く見られた。また話者を起点とする方向表現を伴う例は見られない。逆に目標と共起する例の中には話者及びhierを目標とする例（例：Rück noch ein Stückchen zu mir ***hin***. (BW:583)「もうちょっと私の方につめて」）が見受けられた。

このようにherとhinとの間では話者の関与の仕方が異なるが，それはどの様なメカニズムに基づくのだろうか。

herとhinの示す方向における話者の関与は，ダイクシス的要素であるため，この相違はダイクシス的な要因に基づくと考えられる。本論文では，ダイクシスの観点から，２つの文芸作品におけるherとhinの合成語の空間的用法を，話者の領域に相当する場面の中心点「原点Origo」との関係を検討することにより，問題とする相違点のメカニズムを分析する。また適用される移動の特徴から，その相違点の解明を試みる。

検討対象とする語彙としては，herとhinが対立し且つ共通の方向を表す語彙のペア，即ち下への方向を表すherab-hinab, herunter-hinunter, 上への方向を表すherauf-hinauf, 越える方向を表すherüber-hinüber, 内なる領域から外への方向を表すheraus-hinaus, ある領域内への方向を表すherein-hinein（以下便宜上これらの語彙の内herを含む語彙をher-，hinを含む語彙をhin-と呼ぶ）を取り扱う。これらはher及びhinの後に上下内外等の空間関係に基づく方向を表す構成要素[2]が後続した合成語である。例えば上への方向を表す語aufが後続するheraufは「(話者もしくは話者に準じる者のいる)上へ」を，hinaufは「（話者もしくは話者に準じる者から離れ，ある目標のある）上へ」という結合した意味を表す。

単独語ではなく，合成語であるher-とhin-を対象とする理由は次の通りである。まず単独語のherとhinは語りのテクストにおいて空間的意味の用例数が少ないのに対し，her-とhin-の空間的意味の用法は非常に多く見られる。適切な特徴の抽出を行うには，分析の対象となる用例数は多い方がよい。また比較検討には，その対象が検討対象以外に共有する部分を有する必要がある。ところが，herとhinの単独語には，一見「方向」,「話者の関与」といった共通要素があるように見えるが，実はそれぞれに相違があり，そのままでは比較しがたい。それに対し，her-とhin-の合成語は，herとhinの要素の他，空間関係に関して同一方向を表すという共通要素を含有するため，比較しやすい。

本論文の空間的用法とは，〈空間的用法の条件〉「その動作および出来事の示す方向は，知覚可能と見なされる空間に属する」を満たすものである。この定義に従えば，気体・液

2）本論文でいう「空間関係」とは，上下内外のように，その空間的関係においてOrigo（「原点」: Bühler (1934/1982)による語：端的に言えば話者に帰属し，指示場において定位の基点となる。詳細は2章を参照のこと）を要しない関係を指している。Diewald(1991:42)は，Clark, H. (1973:34f.,48)の記述に基づき，三次元の（知覚）空間は確かに「自己」により獲得されるが，そこからさらに抽出され，自己から独立して他の対象に引き継がれうるとする。したがって，上下左右内外などを表す語は，hier等のような指示語Deiktikumとは異なり，関係を表す命名語relationales Nennwortと呼ばれる。本論文のの著者の見解もこれに従う。

体のような連続体の動きや，Die Dunkelheit brach ***herein***「急に暗くなる」のような時間の推移を表す表現[3] もまた，知覚可能な空間での出来事なので空間的用法となる。また範囲の広がりを表す範囲占有経路表現[4] や静物の向きを表す用法も空間的用法に分類する。このような空間的用法から抽出される意味を空間的意味と呼ぶ。

本論文では，一人のドイツ語母語話者である作家Michael Endeが２つの文芸作品(略号UG: die unendliche Geschichte，略号M: Momo)の場面において，どの様なOrigoや視点にher-とhin-を適用しているのかを分析する。ダイクシスの分析対象となる指示場としては，一見実際に話者が発話を行う現場が理想であるように思われるが，ここでは文芸作品に見られる想像上の指示場を取り扱う。それは現場指示が関わると考えられる会話文にいくつかの問題点が見られるからである。まず対象語彙が空間的意味で用いられている会話文の収集が極めて困難である。さらに会話文であっても，その指示場が想定上の指示場と判断される場合が少なくない。例えば Ich bin in die Unendliche Geschichte ***hinein***geraten beim Lesen, aber als ich dann wieder ***heraus***kam, war das Buch weg (UG:425)「ぼくは読んでいるうちに，はてしない物語の中に入ってしまったんです。でもまたもどってきたら，本が消えていました」という会話文において，指示場は発話現場ではなく，回想された空間であると判断される[5]。会話文に対して，想像上の世界に特化されたテクスト，即ち語りのテクストのおいては,用例の収集が容易であり,また原則として想定上の指示場のみが関与する。

本論文の構成は次の通りである。まず2では，想定上のダイクシスに関する理論的枠組みとして，その下位分類と分類基準をを説明する。3では，her-とhin-の用例を，2で提示した下位分類ごとに比較検討し，Origoとの関係及び表現内容の特徴を分析する。4では，3の分析結果に基づいて，her-とhin-のダイクシス上のメカニズムを解明し，両者のダイクシス的相違の要因を考察する。

3）本論文で空間的用法と見なされる時間的用法は，天体の動きに基づく変化のように，知覚可能な空間での出来事と見なされるものに限定される。従って,時間を価値のある不可算物とし,文全体として「時間の増減，やりとり」を表す用例（Die Arbeitszeit wird weiter ***herab***gesetzt(WdG:1786)「労働時間がさらに**引き下げ**られる」）や時間を空間と見立てる用例（Dieser Zustand dauerte über Ferien ***hinaus*** an. (BW:564)「この状況は休暇を**越えて**続いた」）や，文全体として時の経過を表す場合であっても，知覚できる空間で起こるとは見なされない用例（Diese Revolution hat eine neue Epoche ***herauf***geführt. (WdG:1788)「この革命は新しい時代**の幕を上げ**た」），前後関係や遠近のようにより抽象された一次元空間に見立てられる時間的用法（Der Tag des Konzertes war ***heran***gekommen(WdG:1787)「コンサートの日が**近づいて**来ていた」）は本論文の空間的用法とは見なされない。

4）松本(1997:207)によると、拡がりを持つ対象の位置や範囲を表す移動表現は、Talmy(1996)により「範囲占有経路(coverage path)表現」と呼ばれる。本論文では移動表現に限らず，her-とhin-が適用されている範囲を表す表現をこの名称で呼ぶことにする。

5）実はここで取り扱う二つの文芸作品において，her-とhin-の空間的用法は，場面の架空性が増すほど頻繁に用いられる傾向がある。Momoにおいては基盤となる現実に近い場面よりも，登場人物によって想像された物語場面や現実離れした場面で，her-とhin-の空間的用法はより頻出する。一方die Unendliche Geschichteでは，現実の世界とある架空の場面が描写され，どちらの場面でも，この用法はよく用いられるが，物語全体において，後者の世界が占める割合は非常に高い。このことからher-とhin-の空間的用法は想定上の指示場で用いられる傾向があると推測できるが，この点については更に検討を要する。

２．想定上のダイクシス(Deixis am Phantasma)及びOrigoと視点に関する理論的枠組み

Bühler(1934/82 :102f.)は「原点Origo」をおよそ次のように説明する。

人間の言語の指示場を座標体系によって表示する場合，その「原点Origo」を出発点として「主観的な定位die subjektive Orientierung」が行われる。Origoには，３つの指標語,「ここhier」,「今jetzt」,「私ich」があり，これらは話者に帰属する。

さらにOrigoは移し替えることができる。例えば,整列して体操している人に「前進,後退,右向け右，左向け左」と号令をかけるとき，発話者はしばしば体操をしている相手の定位体系に合わせている。Origoの移し替えが発話現場のみならず，記憶や想像上の空間に向けても行われることにより，想像上の領域にも指示場が構築される。そこで行われる定位付けが「想定上のダイクシスDeixis am Phantasma」である。

Bühler(1934/82 :124ff.)は想定上のダイクシスについて，３つの主要事例を挙げる。

第一の主要事例は，想像された対象が我々のところ，即ち所与の「知覚秩序Wahrnehmungsordnung (ibid. :134)」の中に入り，そこで定位づけられるという事例である。例えばマホメットが山へ向かうという想像上の出来事が「山がマホメットの方へ近づいてくる(ibid. :134)」と表現される場合がこれに該当する。

第二の主要事例は，第一のそれとは全く逆で，我々の方が想像することにより，想像上の地理的な場所へ移動する。そして指示することができ，しかも想像上我が身を置くある特定の「受け入れの立場Aufnahmestandpunkt(ibid.:135)」から我々に精神の目の前に表象された対象を見る。このとき先に挙げたマホメットと山は「マホメットが山の方へ移動する(ibid.:134,135)」と記述される。

第三の主要事例は，第一の事例，即ち我々が自らの知覚秩序にとどまる(Hierbleiben)場合と，第二の事例，即ち我々が想像上のある位置へ移動する(Hingehen)場合との中間の事例である(ibid.:135)。これはいわば「マホメットは山の方を見た」と記述される場合で，マホメットと山はそれぞれの場所に止まり，マホメットが自分の知覚場から山を見る。このとき，山が我々の知覚秩序の中にまで入ることも，我々がマホメットと共に移動することもない。従ってhierは想像上の空間には存在せず，我々は知覚秩序にも想像上の空間にも属さない，この２つの位置設定からなる「超位置Superposition(ibid.:137)」に立たされる。

Bühler(1934/82)が提示する３つの主要事例には，指示場の中心，即ち場面の中心であるOrigoに関して２つの要素が複合している。一つはOrigoが移動するか否かであり，もう一つはOrigoが<u>想像された指示場を見る起点</u>（以後下線部を「視点」と呼ぶ）となるか否かである。第一の事例では，Origoを担うマホメットが移動し，山を見る視点となる。その結果「山が近づいてくる」と記述される。第二の事例では，Origoを担うマホメットの移動と共に指示場も移動するが，Origoはいわば外側から描写され，視点を持たない。第三の事例では，Origoを担うマホメットは静止し，それ以後はともあれ，その描写時点においては視点を持たない場合である。

このように想定上のダイクシスにおける下位分類がOrigoの動静と視点の有無により決定するのであれば，仮定される下位分類のタイプは３つではなく，以下の４つとなる。（括弧内の数字は，それぞれのタイプに属する例文番号を指す。）

表１：想定上のダイクシスの４タイプ

a.　Origoは移動，視点有り：Origoは移動し，そこから場面を見る。(6-8)
b.　Origoは移動，視点無し：Origoは移動し，外側から見られる。(9-13)
c.　Origoは静止，視点有り：Origoは静止し，そこから場面を見る。(1,2,14-32)
d.　Origoは静止，視点無し：Origoは静止し，外側から見られる。(33-37)

タイプaには，Origoとなる登場人物の移動に伴い，場面が移動し，且つその登場人物の視点から場面が描写される例が分類される。タイプbには，タイプaと同様にOrigoとなる登場人物の移動に伴い，場面が移動するが，視点はその登場人物を描写する例が分類される。タイプcには，様々な事例があるが，いずれも場面は静止しており，典型的には，Origoとなる登場人物の視点から場面が描写される。タイプdの事例は，タイプcと同様場面は静止しているが，Origoとなる登場人物は，タイプbと同様，外の視点から描写される。

Bühler(1934/82)の第一の主要事例におけるマホメットの例はタイプa，第二の主要事例はタイプb，第三の主要事例はタイプdに相当する。タイプcは，場面が静止し，Origoを視点として描写する場合をさすが，Bühler(1934/82 :134f.)は特にaと区別することなく，第一の主要事例と見なす。aとcの区別が見過ごされてしまう原因は，おそらく，実際の用例ではOrigoの動静に関わるタイプa,b対c,dの対立が，視点の有無に関わるタイプa,c対b,dの対立ほど際だたないことにある。しかしOrigoと視点の関係の根本にあるメカニズムを解明するには，Origoの動静も必須の要素である。これを示唆する研究として，宮崎・上野(1985)が挙げられる。

宮崎・上野(1985)の視点論は，知覚心理学の立場から「見る」という行為を吟味し，それを他の分野にも応用しようと試みる。その視点の構造は，動的視点と静的視点という対と，実在realityと見えappearanceという２つの対により構成される(ibid. :53)。この動的視点と静的視点の区別は，視点を持つOrigoの動静の区別であり，タイプaとcの対立に関わる。

動的視点とは「動きつつある視点」で，動的視点が見るものは，ある一点からみた個別的な見えではなく，視点を動かすことによる見えの変化のプロセスである(ibid.:53-54)。この見えの変化の法則的な変化こそが対象の実在realityを規定する。想定上のダイクシスのタイプaは，宮崎・上野(1985)の動的視点に該当する。タイプaは物語り場面の中心を担う人物が移動しつつ，そこから見える場面描写で，この移動により，その周囲の状況をそれまでとは別の角度から捉えることが可能になる。一方，静的視点は動的視点のプロセスを瞬間的に静止したものである。静的視点が見るものは，その対象の一つの見えで，変化

の途上にあるものとして捉えられる(ibid. :54-55)。この静的視点は，タイプcの静止し視点を持つOrigoに通じるが，タイプcの視点は一瞬に限定されず，時間的な継続を有する。

宮崎・上野(1985 :9)によると，我々が一点の視点からのみ対象を見ることは極めてまれで，日常生活においては事物をよく見ようとすれば，絶えず首を傾けたり，身体を移動させることによって視点を動かし続ける。また眼球を固定させて見ているつもりであっても，眼球自体は常に微細に振動しているとある(ibid.4-5)。つまり，この視点論では動的視点の方が通常の視点であり，静的視点がむしろ特殊な視点として捉えられている。しかし3章で示すように，本論文で収集した想定上のダイクシスの用例においては，Origoに視点がある場合，動的視点に相当するタイプaはむしろ希で，タイプcの方が主流となる。この相違は，知覚運動と言語による描写との違いに基づくと考えられる。

表１の視点の有無の対立（a,c対b,d）に関する研究としては，西郷(1975)の提唱する視点論がある。西郷(1975 :21)は文芸論の立場から，文学作品中の描写を，視点を担うことのできる登場人物（「視点人物」）に依拠して，２つの視点（「内の目」と「外の目」）を提示する。西郷(1975 :21)によると，「内の目」とはその場面を「ある（登場）人物の目を借りてその人物の内側から」描写する視点であり，「外の目」とはその作品に登場しない立場から描写する視点である。「内の目」をとりうる登場人物は，特に「視点人物」と呼ばれ，物語の筋や場面は概して「視点人物」の「内の目」か「外の目」から描写される。概して，「内の目」はタイプaとcのOrigoが有する視点であり，「外の目」はタイプbとdのOrigoが所有しない視点である。

「視点人物」はOrigoを担う登場人物にほぼ一致する。「視点人物」が移動する場合，大抵場面すなわち指示場全体も移動する。このとき「視点人物」には視点はなく，「視点人物」はいわば「外の目」[6] から描写される。また「視点人物」の立場から場面が描写される場合，「視点人物」に「内の目」が加わる。ただし「視点人物」は必ずしもOrigoを担うとは限らない。例えば(1)のように特に視点を置くべき人物を設定しないまま，状況説明が行われる場合がある。また(2)では「視点人物」はerに設定されてはいるが，場面はそのままで，「視点人物」は一時的に場面から離れる，即ち場面の中心点であるOrigoを放棄している。

(1) Diese Inschrift stand auf der Glastür eines kleinen Ladens, aber so sah sie natürlich nur aus, wenn man vom Inneren des dämmerigen Raumes durch die Scheibe auf die Straße ***hinaus***blickte. (UG: 5)[7]

こんな字が，ある小さい店のドアのガラスに書かれていた。といっても，うす暗い店の中からそのガラスごしに通りを眺めるとき，そう見えるのだったが。(9)

6）この場合の「外の目」は，Bühler(1934/82 :135)の第二の主要事例における「受け入れの立場Aufnahmestandpunkt」に相当する。

7）各例文末には引用文献の略号とその引用箇所のページ数を括弧付けで記載した。またその日本語訳は，原則として引用文献リストに記載した訳本から引用し，原文と一致しない箇所については適宜修正を加えた。各日本語訳の末尾の数字は引用箇所のページ数である。

(2) Dann ging er in sein Zimmer ***hinauf***.

Als er am nächsten Tag ***herunter***kam, sah er, daß Dame Aiuóla noch immer auf demselben Platz saß. (UG:395)

それから，彼は自分の部屋にあがっていった。翌朝おりてくると，アイゥオーラおばさまはまだ昨夜のままそこにすわっていた。(545)

これらの例は，西郷の分析によると，一様に「外の目」からの描写となるが，本論文の分類では，視点を有する静止したOrigoからの描写であるため，タイプcとなる。このように，西郷の「視点人物」は必ずしもOrigoではない。しかし西郷の「視点人物」という術語は，Origoを担う登場人物を指すのに便利且つ理解しやすいため，以後「視点人物」という術語を「Origoを担う登場人物」と再定義し，鍵括弧をはずして用いるものとする。

以上２つの先行研究を提示したが，本論文では先に挙げた想定上のダイクシスの下位分類の４つのタイプを基盤に論をすすめたいと思う。宮本・上野(1985)及び西郷(1975)の論を適用しない理由は次の通りである。まず宮本・上野(1985)及び西郷(1975)はOrigoと指示場という概念が考慮されていないため，本論文の研究対象の分析には不適切である。またこれらの論究では，本論文のタイプaとcの区別，及びbとcの区別には焦点が当てられるが，タイプdは特に考慮されない。しかしタイプdは用例数が多く，タイプb, cから明確に区別することは，ダイクシス的特徴の分析において重要な意味を持つ。

本論文で取り扱う想定上のダイクシスの４つのタイプには，次の分類基準がある。

まずOrigoの動静の対立，タイプab-cdを区別する基準は，場面が移動するか否かである。これはコンテクストに依存し，文の形態論的・統語論的特徴のみに依存するものではない。同じ移動動作の表現であっても，コンテクストにより，異なるタイプに分類されることもある。例えば，例(3)のhinunterは視点人物から見た他の子供たち(Kinder)の移動方向で，場面は変わらない。従ってタイプcとなる。それに対し例(4)のhinunterは視点人物Bastianの移動方向を表し，それに伴い場面が変化するため，タイプbとなる。

(3) Aus den Korridoren scholl das Geschrei der Kinder herauf, die in den Schulhof ***hinunter*** liefen. (UG:45)

校庭へ駆け下りる生徒たちの歓声が，廊下を伝って上へ響いてきた。(65)

(4) Je tiefer Bastian in die Stadt ***hinunter***ging, desto dichter wurde das Gewimmel. (UG:363)

町を奥へ下ってゆけばゆくほど，混雑はひどくなっていった。(498)

視点の有無の対立，タイプac-bdを区別する基準は，Origoの非明示と明示である[8)]。場面描写がある登場人物を中心に行われている場合，その人物がOrigoとみなされる。さらにこの人物が描写の中に明示されなければ，場面はその人物の視点から描写されている

と見なされ，aかcに分類される。一方その人物が描写される，即ち文中に明示される場合，語り手はその人物を外からみることとなり，人物が視点を有するとはいえない。従ってbかdとなる。例(5)のhinausrollenは，視点人物が花から転がり出る移動を表すが，この移動は想像されるのみで，実現しない。従ってOrigoは静止すると見なされ，タイプcかdに分類される。この視点人物は，主語erにより明示されているため，語り手はこれを客体化し外から描写していると見なされる。従ってこの用例はタイプdに分類される。

(5) Bastian mußte sich festhalten, um nicht aus der Blüte ***hinaus***zurollen, die sich immer weiter senkte und nun schon waagrecht stand. (UG:207-208)
花が沈みはじめ，横に倒れてほとんど水平になった。バスチアンは花から転がりでないよう，必死でしがみつかなくてはならなかった。(290)

本論文では，her-とhin-の空間的用法を，以上挙げたOrigoの動静と視点の有無に基づいて，表１にある想定上のダイクシスの４つのタイプに分類する。

３．分析：分類別の統計，Origoとの関係，her-とhin-の比較

３．１． 分類別用例数の概観

３章では，２つの文芸作品（略号UG, M）におけるher-とhin-の空間的用法を２章で挙げたタイプごとに分析する。分析にあたり，予め想定上のダイクシスの４タイプに分類される用例数を以下の通り提示する。各用例数は括弧内に作品の略号の後記載する。また各タイプ別の合計数には，her-及びhin-の総計における割合を%（0.01%以下を四捨五入）で括弧内に表示した。

表２：タイプ別用例数と語彙列用例数の総数

タイプa

her- : heraus(UG:1, M:0) 計1(1.3%)

hin- : hinab(UG:1, M:0), hinunter (UG:3,M:0), hinauf(UG:2, M:0) 計6(2.2%)

タイプb

her- : herab(UG:1, M:0), herunter(UG:4, M:0), heraus(UG:0, M:1) 計6(7.9%)

hin-: hinab(UG:1, M:1), hinunter(UG:17, M:10), hinauf(UG:26, M:5), hinüber(UG:3, M:1), hinaus(UG:26, M:6), hinein(UG:16, M:9) 計121(45.0%)

8）言語表現による話者の明示と主観性に関して，Langacker(1985:126-127)は，以下の３つの例文を挙げる。これらの例によると，話し手を表す表現（a,bの下線部）の主観性はa<b<cの順に強くなり、明示しないcが最も主観的である。本論文において，視点のあるOrigoが関わる表現は以下のcに，視点の無いOrigoは以下のa,bの下線部に相当する。

a. The person uttering this sentence doesn’t really know.
b. I don’t really know.
c. Don’t really know. (126)

タイプｃ

her-: herab(UG:7, M:0), herunter(UG:14, M:2), herauf(UG:7, M:1),
herüber(UG:1, M:0), heraus(UG:5, M:4), herein(UG:13, M:3)　計57(75%)

hin-: hinunter(UG:8, M:2), hinauf(UG:11, M:2), hinüber(UG:1, M:1),
hinaus(UG:7, M:4), hinein(UG:6, M:10)　計52(19.3%)

タイプｄ

her-: herunter(UG:2, M:2), herauf (UG:1, M:0), herüber(UG:0, M:1),
heraus(UG:1, M:3), herein(UG:2, M:0)　計12(15.8%)

hin-: hinunter(UG:14, M:7), hinauf(UG:14, M:6), hinüber(UG:2, M:1),
hinaus(UG:14, M:6), hinein(UG:18, M:8)　計90(33.5%)

語彙別用例数総計

her-: herab(UG:8, M:0), herunter(UG:20, M:4), herauf(UG:8, M:1),
herüber(UG:1, M:1), heraus(UG:7, M:8), herein(UG:15, M:3)　計76 (UG:59, M:17)

hin-: hinab(UG:2, M:1), hinunter(UG:43, M:19), hinauf(UG:52, M:13),
hinüber(UG:6, M:3), hinaus(UG:47, M:16), hinein(UG:40, M:27)　計269 (UG:190, M:79)

３．２．　タイプａ：Origoが移動，視点あり

視点人物の移動に伴い場面が移動し，且つ視点人物の視点から描写されるタイプaに分類される用例数は，her-が1でher-全体の用例数76の1.3％，hin-は6でhin-全体の用例数269の2.2%である。her-とhin-ともにタイプaが低い割合を示す。

her-とhin-の示す方向とOrigoとの関係については，次の通りである。

her-の唯一の用例(6)では，herausは海中の岩壁の隙間から珊瑚の枝が突き出ている方向を表す。これはAmulettを探し求めてそこへ向かう視点人物から見た情景であるため，その方向は視点人物の視界に入る方向であることから，Origoへの方向と見なすことができる。

hin-の用例には，Origoから離れる方向と見なされる用例が3例，見なされない用例が3例がある。まず例(7)のhinaufは，上へ向かう経路の方向を表す。これは視点人物の移動中の位置からより先の方向であり，Origoから離れる方向と見なすことができる。一方例(8)のhinaufとhinunterは移動中の視点人物とほぼ同じ方向へ向かう者たちの移動の方向を表すため，Origoから離れる方向と見なすことはできない。

(6) Das Amulett war glücklicherweise mit der Kette an einem Korallenast hängen geblieben, der aus der Wand einer Felsenschlucht ***heraus***ragte – sonst wäre das Kleinod in eine bodenlose Tiefe hinabgesunken. (UG:152)

幸いなことに，おまもりの鎖が岩の裂け目から突きでた珊瑚に枝にひっかかっていたのだった。－さもなければ，おまもりは底知れぬ深みへ沈んでしまっていただろう。(214)

(7) An manchen Stellen, wo es besonders steil ***hinauf***ging, waren winzige Stufen ausgeschlagen, die für Atréjus Füße natürlich zu klein waren. Er überstieg sie einfach mit einem großen Schritt. (UG:84)

ところどころ，特に急な登りになっている場所には，細かな階段が刻み込んであったが，無論アトレーユの足には小さすぎたので，一またぎでとびこえた。(117)

(8) Riesenhafte turbangeschmückte Dschinns, winzige Kobolde, dreiköpfige Trolle, bärtige Zwerge, leuchtende Feen, bocksbeinige Faune, Wildweibchen mit goldlockigem Fell, glitzernde Schneegeister und zahllose andere Wesen bewegten sich die Straße ***hinauf*** und ***hinunter***, standen in Gruppen beieinander und redeten leise oder hockten auch stumm auf dem Boden und blickten trübselig vor sich hin. (UG:29-30)

ターバンを巻いた巨大な魔鬼たち，小指ほどの妖魔たち，三つ頭のトロルたち，ひげを生やした小人族のものたち，光り輝く妖精たち，山羊足のファーンたち，全身金毛でおおわれた小さな森女たち，きらきらする雪の精たち，そのほか数えきれないほどたくさんのものたちが，大通りをのぼったりおりたり，小さなグループでひそひそはなしあったり，だまって地面にうずくまり心配そうにじっと前を見つめたりしていた。(41-42)

hin-の用例に関しては，もう一つ顕著な傾向が見られる。例文(7)のようにOrigoから離れると見なされるhin-の用例は3例あるが，いずれも道筋の様な範囲の広がりを表す範囲占有経路表現である。この傾向は，視点を持つOrigoが関わるタイプcにも見られる。

3．3． タイプb：Origoが移動，視点無し

タイプbは，aと同様，視点人物の移動に伴い場面が移動する。しかし，このとき視点は視点人物を描写するために，視点人物の中ではなく，外にあると見なされる。タイプbの視点人物は，場面を動かす中心ではあるが，視点を持たない観察されるOrigoである。

タイプbに分類されるher-の用例数は6で，her-全体の7.9%，hin-の用例数は121でhin-全体の45.0%である。タイプbではhin-がher-に対し非常に高い割合を示す。

表現内容に関しては、her-とhin-のいずれも客体化された視点人物の移動に用いられる。例(9)のherab，(10)のhinunter，(11)のhinüberは共に視点人物Bastian, erの移動方向を表す。タイプbに分類される用例は，概してこのように視点人物自身による移動を表すものが多い。収集したher-の用例には，視点人物の移動のみ見受けられる。一方hin-にはその他の用法もある。例(12)のhinausは，sieにより視点人物ihnが運ばれる方向を表す。また例(13)のhinaufとhinunterは視点人物を運搬する乗り物das Schiffの移動方向を表す。

(9) Bastian ließ sich wieder von dem Laternenpfahl ***herab***gleiten. (UG:242)
バスチアンは街灯の柱からすべりおりた。(335)

(10) Dann schlich er die Treppe ***hinunter*** in den ersten Stock. (UG:79)
それからそうっと階段を降りて二階へいった。(111)

(11) Bastian ging zu ihr(=einer feuerroten Düne) ***hinüber***, schöpfte mit beiden Händen von dem roten Sand und trug ihn zu dem blauen Hügel. (UG:211)
バスチアンはその丘へゆき両手で赤い砂をすくうと，青い丘に持ってきた。(294)

(12) Dann fühlte er, wie sie ihn hochhob und auf dem Arm ***hinaus***trug. (UG:390)
それから抱きあげられ，運ばれてゆくのを感じた。(537)

(13) Heulend und brüllend warf sich der Wirbelsturm auf das Schiff, schleuderte es turmhoch ***hinauf*** und abgrundtief ***hinunter***. (M:28)
暴風はうなりをあげておそいかかり，船を目もくらむ高さから奈落の底へと翻弄します。(38)

タイプbに分類される用例は，Origoの移動方向を表すため，Origoへの接近ともOrigoからの離脱ともいえない。her-の6例は下への方向を表すherab(1)とherunter(4)，内なる領域から外への方向を表すheraus(1)に限定される。一方hin-の121例の内訳は，hinab(2), hinunter(27), hinüber(4), hinauf(31), hinaus(32), hinein(25)で，語彙は多岐にわたり，また各用例数も多い。hinabとhinüber は用例数としては少数だが，全体数(hinab:3, hinüber:9)からみると，66.7%と44.4%でかなり高い割合を示す。

以上のことから、her-はOrigoへの方向に反するbの例が少なく、語彙も限定されているのに対し、hin-はOrigoから離れる方向に反するbの例が多く、語彙も多岐にわたるということが、数値の上から示される。

3．4．タイプc：Origoが静止、視点有り

タイプcには、その場面が静止しているOrigoを視点として描写される用例が分類される。典型的には、視点人物がOrigoとなり、その「内の目」から場面が描写される。その他,次のような２つの場合もcに分類される。まず第一に、既に２章で西郷の論を紹介する際、例(2)を用いて説明したように、登場人物が静止している場面のOrigoから離れたり戻ったりする場合がある。例(2)では，それまでOrigoであった登場人物erが客体化され移動するにも関わらず、場面は静止している。即ちこの時点において登場人物erはもはやOrigoではない。さらにその場面が中心に描写されることから，erは場面の中心の空所となった原点から描写されると考えられる。これは，静止し視点を有するOrigoからの描写であり，cに分類される。第二に、その場面が視点人物ではなく一般的な視点から場面が描写される場合もまたcに分類される。例(14)は視点人物の登場前の場面の描写で、雨だれがある店

の扉のガラス部分を伝って下へ落ちる様子を表す。例(15)は視点人物が聞いた伝説の内容で、視点人物とは直接関わりのない場面が一般的な視点から描写されている。

(14) Draußen war ein grauer kalter Novembermorgen, und es regnete in Strömen. Die Tropfen liefen am Glas ***herunter*** und über die geschnörkelten Buchstaben. (UG: 5)
灰色の，冷たい十一月の朝だった。外はどしゃ降りで，雨の雫がガラスにあたり，その飾り文字の上を流れおちていた。(9)

(15) Die Kleidung, die die Yskálnari trugen, war also zugleich eine Art Schwimmweste, für den Fall, daß jemand in den Nebel ***hinein***geriet. (UG:374)
イスカールナリが来ている衣服は，もし霧の海に落ちた場合，そのまま救命胴衣の役もはたした。(514)

タイプcに分類されるher-の用例数は57でher-の全体数76の75.0%を占める。hin-の用例数は52で、hin-全体数269の19.3%である。her-のタイプcは非常に高い割合を示すのに対し、hin-のタイプcの割合は、タイプbの半分以下である。

her-とhin-の示す方向とOrigoとの関係は次の通りである。

her-ではOrigoへの方向と見なされる用例は45例で，c全体のher-の用例数の78.9%，Origoへの方向と見なされない用例は12例でc全体の21.1％を占め，her-は比較的高い割合で，Origoへの方向を表すといえる。例(16)のheraufは，子供たちの騒ぐ声が上にいる視点人物に聞こえてくる方向を表し，例(17)のhereinは視点人物のいる場所に入ってくる用務員の移動方向を表す。一方，例(18),(19),(20)は特にOrigoへの方向を表すとはいえない。例(18)は視点人物から見た場面で，老人の髭や髪が垂れ下がっている方向を表すが，このとき視点人物は方向の目標側，即ち老人の下にはいない。また例(19)のherunterは巨大クラゲの触手が力を失い垂れ下がる方向を表すが，これを見ている視点人物は出来事の全体を見渡せるところにいて，腕の下方に位置している訳ではない。また例(20)のherausは視点人物の位置する領域Phantásienから離れる方向を表す。

(16) Dann klangen noch für eine kleine Weile verschiedene Rufe von der Straße ***herauf***. (UG:66)
次に外の通りでいろいろ叫びあう声がしばらく聞こえた。(92-93)

(17) Die Klotür ging auf, glücklicherweise gerade so, daß sie Bastian versteckte. Der Hausmeister der Schule kam ***herein***. (UG:80)
トイレのドアが開いた。その開いたドアが，幸運にもちょうどバスチアンをかくした。用務員が入ってきた。(111-112)

(18) Auf dem einen saß ein sehr alter Mann, dessen silbernes Bart- und Haupthaar bis auf den Gürtel ***herab***wallte. (UG:242)

一つには銀のひげと髪が波うちながら帯にまで達している，おそろしく年をとった老人が腰かけていた。(334)

(19) Sofort hingen die Fangarme beider Quallenhälften schlaff und kraftlos ***herunter***, und die Gefangenen konnten sich herauswinden. (M:27-28)
まっぷたつになったクラゲはたちまち触手をだらりと力なくさげたので，二人はからだを抜いて出ることができました。(37)

(20) Wenn es unmöglich war, aus Phantásien ***heraus***zukommen, dann war es auch unmöglich, ein Menschenkind von jenseits der Grenzen zu Hilfe zu rufen. (UG:130)
ファンターエジエン国から出ることが不可能なら，かなたにある外国から人の子を呼んでくることも不可能だ。(183)

Origoへの方向を示さないher-の用例には次の特徴がある。まず語彙が，下への方向を表すherab（例18）とherunter（例19），及び内なる領域から外へ出る方向を表すheraus（例20）に限られる。さらにherabとherunterは，衣服や髪，髭，腕などが垂れ下がるといった，意志的な移動ではなく，むしろ引力に従った非意志的な動きを表す。

hin-の示す方向とOrigoとの関係については次の通りである。cの分類されるhin-の52例のうち49例がOrigoから離れる方向と見なされるが，これらの文脈では多くの場合，起点からの離脱よりも行く先，目標の方が重要となる。例(21)のhinüberは，視点人物から離れていくsieの移動方向を表す。これらは確かにOrigoから離れる方向と見なされるが，重点がむしろ目標にある。例(22)のhinaufは，確かに声を発するein anderesよりも下に位置する視点人物から離れる方向と見なされるが，力点はむしろさらに上にいる相手に向かって呼びかけることにある。一方Origoへの方向とは見なされない用例はわずか3例で，hinunterに2例とhineinに1例ある。例(23)のhinunterは，視点人物の方へ向かう光の移動に適用されているので，Origoから離れる方向とはいえない。例(24)のhineinもまた　悲鳴と金切り声の渦中にある視点人物への方向を示し，Origoから離れる方向ではない。

(21) Vor sich hinmurmelnd ging sie zu dem Glücksdrachen ***hinüber***, der noch immer reglos schlief. (UG:93)
ばあさんはぶつぶつ一人言をいいながら，今もまだ身動きもせずにねむっている幸いの竜の方へいった。(129)

(22) Eines von ganz oben fragte: „Was hat er gesagt?“
Und ein anderes rief von unten ***hinauf***:
„Der Dingsda sagt, wir können das nicht machen.“ (UG:282)
ずっと上の方にいた一匹がたずねた。「なんだって？」下から別のがどなった。「そこのだれやらはね，そんなことをしちゃだめだっていったのさ。」(388)

(23) Das graue Dämmerlicht, das in den engen Häuserschacht ***hinunter***tropfte, reichte kaum noch aus, um den hellen Leib des Jungen von dem schwarzen Fell des Ungeheuers zu unterscheiden. (UG:153)
たち並ぶ家々の隙間を通してかすかに届く灰色のうす明かりでは，明るい色の少年の体を怪物の黒い毛から見わけることすらもはやむずかしかった。(215)

(24) Mitten in dieses Gezeter und Gekreische ***hinein*** ließ sich plötzlich von fernher ein leiser und doch mächtiger Klang vernehmen, der wie das Dröhnen einer großen Bronzeglocke tönte. (UG:409)
わめきと悲鳴の大騒ぎのただ中に，突然，遠くの方で，低い，しかし力強い響きがした。それは，大きな青銅の鐘がどよめくようだった。(563)

移動の内容については，her-とhin-において次のような特徴がある。
まず，her-において範囲占有経路表現はすべて下への方向を表すherab, herunterに現れ，先の例(18)と(19)で示したように，全て引力に従って下へ垂れ下がる状態を表す。その合計は8例で，cに分類されるherab, herunterの総計23の34.8%を占める。また，それらは全てOrigoへの方向を表さないものと見なされる。その他，非意図的な移動や自然現象を表す用例が17例と多い。その内訳は，例(25)のように光の方向を表すもの(herab:1例, heraus:1例, herein:1例)，例(26)のように音響の方向を表すもの(herunter:1例, herauf:4例, herüber:1例)，例(27)のように朝や夜などの一日の時間帯や嵐などの到来を表すもの（herauf:2例, herein:4例），先の例(14)のように雨だれなど意志を持たないものの落下運動を表すもの(herunter:2例)がある[9]。これと範囲占有経路表現を併せると計25例となり，非意図的なher-の表現はc全体の44.8%で，約半分を占める。

(25) Aus der Höhe, wo eine Dachluke war, drang milchiger Lichtschein ***herab***. (UG:14)
天窓のある上の方から，乳色の光が射しこんでいた。(22)

(26) Dann klangen noch für eine kleine Weile verschiedene Rufe von der Straße ***herauf***. (UG:66)
次に外の通りでいろいろ叫びあう声がしばらく聞こえ，やがて学校中がしんと静まりかえった。(92-93)

(27) Die Nacht war längst ***herein***gebrochen, eine sternenlose Nacht voller Rauch und Flammen. (UG:355)
日はとっくに暮れ，炎と煙にみたされた星のない夜になっていた。(489)

一方hin-の範囲占有経路表現は14例あり，下への方向に限らず，hinunterに5例（例28,31），hinaufに6例（例29），hinausに1例（例30），hineinに2例（例30, 31）と，her-に比

9）Eichinger(1989:148,196)は，herauf, herab, herunterが自然現象の描写に用いられる傾向があることを，辞典の見出し語と例文に基づいて指摘している。

して様々な種類の方向に分布している。またそれ以外に自然現象や非意図的な移動を表すものもあるが，her-よりも遙かに少なく，4例である。その内訳は，先に挙げた例(23)の光の方向を表すhinunter 1例，以下の例(32)のように窓や戸の向きを表すものが2例, 先の例(24)の音響の方向を表すhineinである。このうち例(23)のhinunterと(24)のhineinはOrigoへの方向を示さないものと見なされる。従って，タイプcに分類されるhin-の非意図的な移動表現は，総計18例で，タイプcのhin-の総用例数52の32.7%で比較的高い割合を占めるが，その大部分は範囲占有経路表現(c全体の26.9%)となる。

(28) Auf einer schrägen Rampe, die zum Grunde der Grube ***hinunter***führte, waren einige Lastwagen mitten in der Fahrt stehen geblieben. (M:256)
穴の底につうじる斜面には，なん台かのトラックがとちゅうでとまったままになっています。(339)

(29) Kein Weg führte ***hinauf***, keine Treppe. (UG:160)
だがそこに通じる上り道はなく，階段もなかった。(225)

(30) Er machte sich auf den Weg durch das Gewirr der sinnlosen Gebäude, und bald zeigte sich, daß der Weg hinein sehr viel einfacher gewesen war als der Weg ***hinaus***. (UG:370)
彼はごたごたと並ぶ無意味な建物の間を縫って歩きだしたが，まもなく，入ってくるほうが外へ出るよりはるかに簡単だったことがわかった。(509)

(31) Alle Sendboten und Abgeordneten des phantásischen Reiches mußten sich in einer Reihe hintereinander aufstellen, und diese Reihe reichte vom Spiegelthron nicht nur die ganze spiralförmige Hauptstraße des Elfenbeinturms ***hinunter***, sondern weit, weit in das Gartenlabyrinth ***hinein***, und immer neue schlossen sich hinten an der Schlange an. (UG:353)
ファンタージエンのあらゆる国の使者や種族の代表が一列に並ばせられたが，その列は鏡の玉座の前からエルフェンバイン塔のらせん状の大通りを一番下にきてもまだ終わらず，迷路苑の道にまでえんえんとつづいた。そして，なお新しく加わるものがひきもきらず，長蛇の列の後ろについた。(486-487)

(32) Jeweils hatten die beiden Türen, die aus einem Zimmer ***hinaus***führten, irgend etwas miteinander gemein – die Form, das Material, die Größe, die Farbe – aber irgend etwas unterschied sie auch grundsätzlich voneinander. (UG:233)
各部屋から出られる二つの扉は，いつも何かたがいに共通する点－形とか材質，大きさ，色など－を持ちながら，同時に何か決定的に区別できるちがいを持っていた。(323-324)

以上の分析に基づき，さらに範囲占有経路表現を含む非意図的な移動表現について，

her-とhin-を比較すると，hin-において範囲占有経路表現の占める割合(76.4%)がher-のそれ(32.0%)に対し極めて高いことがわかる。さらに互いの範囲占有経路表現を，Origoとの関係という観点から比較すると，次の結果が得られる。即ちher-は下への方向を表すherab, herunterに限られ，その全てがOrigoへの方向とは見なされない。それに対し，hin-の場合は比較的多様な方向を表す語彙があり，さらにその全てがOrigoから離れる方向を表す。すなわち，her-において範囲占有経路表現は，Origoへの方向というherの本来の意味から逸脱するが，hin-のそれは，Origoから離れる方向という本来の意味に合致する。

3．4． タイプd：Origoが静止，視点なし

タイプdは，cと同様場面は静止しているが，Origoとなる視点人物は客体化され，その外側から描写される。例えば視点人物の視る行為，話す行為，体の一部を動かす行為などは，場面が移動することなく，視点人物はいわば外側から観察される。また視点人物が自分自身の移動を想像するという場合も，視点人物が客体化されていればタイプdに分類される。さらに行為者および移動物が視点人物以外であり，且つその行為を描写する文中に視点人物が客体化され組み入れられる場合もdに分類される。

タイプdに分類されるher-の用例数は計12でher-全体の用例数76の15.8%，hin-の用例数は計90でhin-全体の33.5%である。her-に比して，hin-のタイプdは高い割合を占める。

Origoとの関係については次の通りである。

her-は1例を除く11例がOrigoへの方向を表す。例(33)のheraufは視点人物ihmへの方向を表す。それに対して例(34)のherausは視点人物sieがその現在いる場所から出る方向を表すため，Origoへの方向とは見なされない。タイプdのher-の用例の内，Origoへの方向を表す例は全体の91.7%，Origoへの方向を表さない例は全体の8.3%となる。

(33) Aber nur das vielstimmige Geschrei aus dem Schulhof drang zu ihm ***herauf***. (UG:46)
しかし下の校庭で騒いでいる大勢の生徒の声が入り乱れて聞こえてくるだけだった。(66)

(34) Einen Augenblick dachte sie auch daran, wie sie wohl je wieder hier ***heraus***kommen könne, aber noch ehe sie recht dazu kam, sich Gedanken zu machen, endete die Röhre plötzlich in einem unterirdischen Gang. (M:257)
ここから出るにはどうすればいいんだろうという思いが，ちらっとモモの頭をかすめました。でもそれ以上考えるひまもなく，とつぜん土管がおわって，地下道に出ました。(340)

hin-の場合，81の用例，つまりタイプdの90.0%がOrigoから離れる方向と見なされる。次の例(35)は視点人物Momoの体をihrの方へ曲げる動きを表す。その移動方向はOrigoから離れる方向と見なされる。残り9例，即ち10.0%はOrigoから離れる方向とは見なされない。

例(36)のhinunterは視点人物Bastianへ呼びかける方向を表すため，Origoから離れる方向とは見なされない。

(35) Momo beugte sich vollends zu ihr ***hinunter*** und krabbelte sie mit dem Finger unter dem Kinn. (M:119)
モモはふかくからだをかがめて，指でカメのあごの下をなでてやりました。(158)

(36) Die erste rief wieder zu Bastian ***hinunter***, wobei sie wie verrückt hopste: „Doch, das können wir!“ (UG:282)
最初のが狂ったようにとびはねながら，また下のバスチアンに叫んだ。「どっこい，だめじゃねえ！」(389)

移動の内容に関するher-とhinの特徴は次の通りである。

her-に関しては，例(34)を除き，視点人物以外の移動物が視点人物の方へ移動するか，視点人物が移動物を自ら自分の方へ移動させることを表す。

hin-は体の一部をある方向へ動かす表現が非常に多く，視点人物がその動作主となることが多い。殊に視線の向きを表す用例（例37）が顕著であり，hinunterに14例，hinaufに10例，hinüberに3例，hinausに4例，hineinに2例見受けられ，計33例，タイプdのhin-の全体の36.7%を占める。これに対してタイプcでは26.9%を占めていた範囲占有経路表現は，タイプdにおいては3例のみで，タイプdのわずか3.3%にすぎない。

(37) Er öffnete die Tür des Schlafgemaches und blickte in die große Höhle ***hinaus***. (UG:217)
バスチアンは寝室の扉を開け，大きな洞穴をのぞいてみた。(303)

３．５．　タイプ全体から見た分析結果

以上４つのタイプに見られる用例数の割合と，Origoとの関係及び移動の内容から得られるher-とhin-の特徴は以下の通りである。

her-

① タイプcが全体の75.0%と最も多く，次いでタイプdが15.8%，タイプbが7.9%，タイプaが1.3%を占める。

② Origoへの方向を表す用例は計57(a1+c45+d11)で全体数76の75.0%，Origoへの方向を表さない用例は計19(b6+c12+d1)で全体の25.0%である。

③ 全体を通して，Origoへの方向とは見なされない方向に適用される語彙は，下への方向を表すherab, herunterと内なる領域から外への方向を表すherausに限られる。さらにOrigoへの方向を示さない下への方向を表すherab, herunterは，タイプcにおいては引力に従って垂れ下がっているものの状態（例18,19）を表す。

④ 範囲占有経路表現はOrigoへの方向を示さないherab, herunterに現れるが，それ以外には見られない。

hin-

① タイプbが全体の45.0%と最も多く，次いでタイプdが33.5%，タイプcが19.3%，タイプaが2.2%を占める。

② Origoから離れる方向を表す用例は計133(a 3+c49+d81)で全体数269の49.4%，Origoから離れる方向を表さない用例は計136(a3+b121+c3+d9)で全体の50.6%である。

③ Origoから離れる方向を表さない用例は概してタイプbに属する。タイプa，c，dに分類される用例は，その多くがOrigoから離れる方向と見なされる。Origoから離れる方向を表すか否かを区別する語彙的特徴は特に無い。

④ Origoから離れる方向を表す用例の移動内容については，次の特徴がある。タイプaとcは範囲占有経路表現（17例：a3＋c14）が高い割合を占め，タイプdは体の一部を動かす動作，特に視点の向きを表す用例（33例）が高い割合を占める。

４．まとめ：分析結果から得られるher-とhin-のダイクシス的特徴と推定される要因

さて，冒頭でBWの記述において，ダイクシス的特徴である話者の存在がherでは良く保たれ，hinでは希薄となる傾向にあることを指摘した。この傾向は3.5の分析結果において次のように反映されている。

まず3.5のher-とhin-の特徴①をOrigoにおける視点の有無という観点から見ると，her-は全体の約8割が視点を有するOrigo（タイプa,c）と共起するが，hin-は逆に約８割が視点を持たないOrigo（タイプb,d）と共起することがわかる。またOrigoの動静という点からいえば，her-は全体の9.2%が移動するOrigo(a,b)，90.8%が静止しているOrigo(c,d)と共起する。一方hin-は全体の47.2%が移動するOrigo(a,b)，52.8%が静止するOrigoと共起する。共に静止するOrigoと共起する割合が多いが，hin-はher-よりも遙かに動的Origoと共起する場合が多い。さらにタイプaの動的視点は全体の割合が非常に少なく，her-とhin-の方向表現とは結びつきにくいことがわかる。その原因は，おそらく移動するOrigoの視点から情景を描写することが静止しているOrigoの視点から描写する（タイプc）のに比して，極めて困難であるからと考えられる。この結果は，動的視点をデフォルトと見なす宮崎・上野(1985)の視点論に矛盾するが，自ら移動しながら風景を描写することは，止まっている場合より困難であることは，我々の実体験から考えても自然なことであろう。

またher-とhin-の特徴②にあるように，her-の用例はOrigoへの方向を示すものが75.0%であるのに対し，hin-のOrigoから離れる方向を表すものの割合は49.4%である。さらにタイプcとdを比較すると次のことが分かる。her-はOrigoへの方向を表す57例のうちタイプcの用例が45例を占め，タイプdの11例より遙かに上回る。一方hin-はOrigoから離れる方向を表す133例のうちタイプdが81例を占め，タイプcは次いで49例である。

タイプcとタイプdのOrigoには視点の有無という相違がある。従ってher-の「Origoへの方向」とは，57例中45例が「視点のある静止しているOrigoへの方向」，11例が「視点の無い静止しているOrigoへの方向」となる。それに対してhin-の「Origoから離れる方向」とは，132例中81例が「視点の無い静止しているOrigoから離れる方向」であり，49例が「視点のある静止しているOrigoから離れる方向」である。

ダイクシスにおいて話者という存在を考える際，我々は通常視点のあるOrigoを想像する。例えばLatzel(1979:4)はherとhinの意味を表す図において，話者を目の形で表示している。それが原因となっているのか、Origo自体が視点を持つものと考えられているようである。本論文の２章で挙げたBühler(1934/82)の第二と第三の主要事例，即ち本論文のタイプbとdの視点を持たないOrigoは，通常なじみのないものに感じられると思われる。

もし一般的に話者は視点のあるOrigoと認識されているとすれば，her-の用例は「視点のあるOrigoへの方向」を表すcの45例とaの1例の計46例，つまり「Origoへの方向」を表す用例の80.7%，her-全体の60.5%が「話者への方向」を表すと認識されることになる。一方hin-の用例で「話者から離れる方向」と認識されるのは,「視点のあるOrigoから離れる方向」を表すcの49例とaの3例の計52例で，これは「Origoから離れる方向」を表す用例の39.1%，hin-全体の19.3%である。

さらに「話者への方向」と見なされるher-46例と「話者から離れる方向」と見なされるhin-52例の移動の内容を比較すると次のことがわかる。her-に関しては移動物となり視点のあるOrigoへ向かう移動物が，登場人物や物，光や音響など様々ではある。しかしこれらの移動物は接近することを容易に知覚できる。一方分析結果④に示したように，hin-のタイプaとcの用例には範囲の広がりを表す範囲占有経路表現が併せて17例(a3+c14)見られる。範囲占有経路表現は，ある範囲がある方向へ広がることを表す，いわばOrigoからの継続であり,「Origoから離れる方向」における「離脱」の要素はきわめて希薄である。また，hin-のタイプdにおいて「Origoから離れる方向」と見なされる用例の多くが，視点人物即ちOrigoが体の一部を動かす動作，特にその視線の向きを表す表現が多い。このような表現もまたOrigoとの結合が強く，「離脱」の要素はきわめて希薄である。以上の分析結果は，接近と離脱の基点となるOrigoの役割が，her-に比してhin-において弱いということを示唆する。

「Origoへの方向」に該当しないher-の分析結果③，④と，「Origoから離れる方向」に該当しないhin-の分析結果③からは次のことがわかる。her-の「Origoへの方向」に該当しない用例は，下への方向を表すherab, herunterと内なる領域から外への方向を表すherausに限られる。そのうち下への方向を表すherabとherunterに関しては，その用例のほとんどが引力に従って非意図的に下へ垂れ下がる状態を表す範囲占有経路表現である。移動という現象の典型が「移動物がその存在場所を変えてゆく過程」とすれば，範囲占有経路表現は典型的な移動とは言い難い。一方hin-の「Origoから離れる方向」に該当しない用例は，タ

イプbに見られるように，視点人物が意図的にその居場所を変化させる，いわば典型的な移動である。つまり，her-において典型的な移動は，「視点のあるOrigoへの方向」として出現し，hin-においては「視点のあるOrigoから離れる方向」ではなく，「視点を持たないOrigoの移動」として出現することになる。

以上，her-とhin-の示す方向とOrigoとの関係，またその関係に基づき移動の種類を比較した結果，her-とhin-の示す方向とOrigoとの関係を次のように要約することができる。

her-は，概して視点を有するOrigoと結合し，「視点を有するOrigoへの方向」を表す。その例外となる語彙は，下への方向を表すherab, herunter及び内なる領域から外への方向を表すherausに限られる[10)]。また下への移動方向については，しばしば範囲占有経路表現という非典型的な移動と共起する。hin-は概して視点を持たないOrigoと結合する。またタイプcに見られるように「視点の有するOrigoから離れる方向」を表す場合，典型的な移動表現と共起する場合もあるが，その一方でしばしば移動としては非典型的な範囲占有経路表現とも共起する。またタイプdに見られる「視点を持たないOrigoから離れる方向」は頻繁に非典型的な移動である体の一部を動かす動作と共起する。hin-において典型的な移動は，専らタイプbの「視点を持たないOrigoの移動」として実現する。話者を「視点を有するOrigo」とし，「方向」とは典型的な移動と結合するものとすれば，her-について典型的な移動と視点を有するOrigoが結合し，「話者への方向」が認識しやすく，話者の意味機能が確立するが，hin-については典型的な移動と視点を有するOrigoは結合せず，「話者から離れる方向」は認識しがたく，話者の意味機能はきわめて希薄となる。

さて，her-とhin-において，なぜこのようなOrigoを巡る相違が起こるのだろうか。

タイプ別の表現内容を見ると，この相違は人の原体験と日常生活に基づくと考えられる。

人が初めて自分への方向を認識するのは，おそらく自分の方へ近づいてくるものを知覚することによる。また日常生活においても，多くの場合，自分へ近づいてくるものの知覚を通して自分への方向を認識する。この知覚主体の立場はタイプcの視点をもつ静止しているOrigoに合致する。これは知覚のOrigoともいえる。

「自分から離れる方向」の認識も，自分から離れていくものの知覚を通して，つまり知覚のOrigoを通じて，初めて実現すると考えられる。これはhin-のタイプcの内，静止している視点を持つOrigoから離れる方向を表す用例に該当する。しかしその後さらにもう一つ重要な体験がある。それは，自分の知覚するある対象に向かって，自分自身を自ら動かすということである。まだ体を思うように動かせない場合には，目を向けたり，耳を傾けたりし，さらに成長するとそれに向かって手を伸ばしたりする。これはタイプdのうち，視点を持たない静止するOrigoから離れる方向を表すhin-の事例に相当する。移動できるようになれば対象に向かって移動する。これはタイプbの事例に該当する。そして「自分をその存在位置から動かす」ことは，「離れる移動物の知覚」に比べ，日常生活におい

10）なぜこれらの語彙が例外となるかについては，方向の特徴から説明することができる。端的に言えば，これらの語彙の表す方向が共通して，目標よりも起点側に重点があることに由来する。詳細は瀧田(2006), (2007)を参照のこと。

て頻度も重要性も高い。このように「自分から離れる方向」には離れる移動物を知覚するOrigoと自分の体を動かす基準としてのいわば行為のOrigoがある。前者は視点のあるOrigo,後者は視点を持たないOrigoに相当する。そして「自分から離れる方向」においては視点のある知覚のOrigoより，視点のない行為のOrigoの方が優勢となる。

行為のOrigoが視点を持たないのは，Origoが客体化され，観察されるからである。ではなぜ行為のOrigoが客体化され，観察されるのか。それは行為の意図に由来する。即ちある目標に向かって行為を行おうとするとき，予めそれを行う意図が存在し，その行為は終了するまでいわばその意図に支配されている。つまり（意図的な）行為とは行為者が行為者自身の意図によって客観視される現象なのである。この場合視点を持ちうるのは行為者そのものではなく，それを意図するいわば超自我と他者である。

さてOrigoを客観視する視点がhin-に関与すると見なすことにより，タイプaとcに頻出する範囲占有経路表現との関係も次のように解釈できる。hin-についてOrigoは確かに視点を持ち方向の起点側に位置することもある。しかしその場合であっても，実は行為の視点の影響を受け，範囲全体を見渡す視点，つまり起点から目標までの全体から距離を置き，これを見渡すことができる視点をとっているのではないだろうか。

このように，知覚のOrigoは視点を持つOrigoに，行為のOrigoは視点を持たないOrigoに合致する。そして視点を有する知覚のOrigoはある出来事を一点からのみ見る主観的な見方につながる。それに対し，視点を持たない行為のOrigoは，解放された視点によって様々な角度から観察する客観的な見方につながる。ドイツ語の世界では，知覚と行為，主観と客観といった対立がherとhinの用法の中に内包されているといえよう。

［引用文献略号リスト］

BW= Brockhaus Wahrig Deutsches Wörterbuch in sechs Bänden. hrsg. v. Krämmer, Hilderad; Zimmermann, Harald, F. A. Brockhaus Wiesbaden Verlags – Anstalt, Stuttgart, 1981.

M= Ende, Michael: Momo. Stuttgart und Wien 1973.（大島かおり訳『モモ』岩波書店1976年。）

UG= Ende, Michael: Die unendliche Geschichte, K. Thienemanns Verlag, Stuttgart, 1979.（上田真而子・佐藤真理子訳『はてしない物語』岩波書店1982年。）

WdG= Wörterbuch der deutschen Gegenwartssprache, hrsg. V. Ruth Klappenbach u. Wolfgang Steinitz Akademie-Verlag-Berlin, 1978

［主要参考文献］

Bühler, Karl **(1934/1982)**: Sprachtheorie. Die Darstellungsfunktion der Sprache, Fischer, Stuttgart, 1982 (Nachdruck von 1934).

Clark, Herbert, H.**(1973)** : Space, Time, Semantics, and the Child, in Moore, Timothy E. (hrsg.): Cognitive Development and the Acquistion of Language, New York (usw.), Academic Press, 27-63.

Diewald, Gabriele Maria **(1991)**: Deixis und Textsorten im Deutschen (=Reihe Germanistische Linguistik 118), Niemeyer, Tübingen.

Eichinger, Ludwig M.**(1989)** : Raum und Zeit im Verbwortschatz des Deutschen. Eine valenzgrammatische Studie (= Linguistische Arbeiten, Bd. 224) Niemeyer, Tübingen.

Langacker, Ronald W. **(1985)**: Observations and speculations on subjectivity, in: Iconicity in Syntax, 109-150.

Latzel, Sigbert **(1979)**: Der Gebrauch von „hin“ und „her“ im heutigen Deutsch. Eine Vorstudie zu didaktischen Problemlösungen, Goethe-Institut, Arbeitsstelle für wissenschaftliche Didaktik, Projekt „Lehrschwierigkeiten im Fach ‚Deutsch als Fremdsprache‘“, München.

松本曜 **(1997)** :「空間移動の言語表現とその拡張」（中右実編）:『空間と移動の表現』研究社 125-230, 234-236ページ。

宮崎清孝・**上野**直樹 **(1985)** :『視点（＝認知科学選書１）』東京大学出版会

西郷竹彦 **(1975)** : 『視点・形象・構造（＝西郷竹彦文芸教育著作集17, 文芸学講座１）』明治図書。

瀧田恵巳 **(2006)** :「現代ドイツ語herとhinの非空間的意味について　－herauf/hinauf, herab/hinab, herunter/hinunter, herüber/hinüberに関する分析」『言語文化研究』第32号（大阪大学言語文化研究科）5-26ページ。

瀧田恵巳 **(2007)** :「内から外への方向表現による非空間的意味について　－現代ドイツ語heraus/hinausに関する分析－」『言語文化研究』第33号（大阪大学言語文化研究科）57-80ページ。

Talmy, Leonard **(1996)**: Fictive motion in language and “ception”, in Language and space, eds. Paul Bloom, Mary A. Paterson, Lynn Nadel and Merrill f. Garrett, 211-276, Cambridge, Mass.:MIT Press.